

知的障害特別支援学校における自立活動の充実

～生徒の的確な実態把握を基にした課題設定とそのアプローチ～

倉田 沙耶香, 古里 王明, 金輪 裕子, 上園 宗徳 (熊本大学教育学部附属特別支援学校)

本吉 大介 (熊本大学大学院教育学研究科)

Introduction | 「できる」「分かる」を胸に、社会へ

これまで、本校高等部の自立活動はコミュニケーションに特化して行われてきた。知的障がいの子が社会へ出るにあたり、コミュニケーションは大きな課題であることが多い。しかし、個の課題に目を向けると、手指の巧緻性や、自己理解、ストレスマネジメント等、他にも取り組むべき課題があった。昨年度4時間を「チャレンジタイム」と位置付けて、個の課題へのアプローチを行ったところ、苦手だったものに興味を示したり、積極的に取り組めるようになったりする等、明らかな伸びが見られた。

「作業の〇〇ができた」「自分の△△が分かった」等の経験を積み、社会へとはばたいてほしいと思い、自立活動に焦点を当て、充実を図ることにした。

- 目的**
- ・的確な実態把握を基に、個の課題設定
 - ・グループの学習形態で個の課題にアプローチできる授業づくり

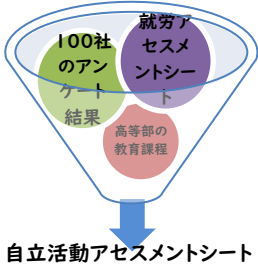
- 方法**
- ・生徒の的確な実態把握と個の課題設定を可能にするアセスメントシートの開発
 - ・アセスメントを基にしたグルーピング(因子分析)
 - ・各グループの授業づくりの充実

Method | 的確な実態把握を基にした課題設定

自立活動の充実を図るために、熊本大学大学院教育学研究科(特別支援)の本吉大介准教授と共同研究に取り組んだ。

大区分	小区分	項目内容	生徒の実態	課題の優先度	ヒューマン・サイズ
A	生活に関すること	規則正しい生活ができる	1	2	356
		食事を考えた食事を摂ることができる	1	1	297
		必要な服装、体調面への配慮ができる	1	1	331
		掃除、調理、洗濯などが一人でできる	2	2	223
		整理整頓をすることができる	2	3	309
		買い物に一人で行くことができる	2	2	221
		電話対応ができる	2	1	170
		連絡、支度することができる	1	1	315
		整音に気を付けることができる	1	2	294
		毎日お風呂に入るができる	1	1	331
		場に合った服装ができる	2	2	240
		欠勤、遅刻、早退などがない	1	1	340
		公共交通機関を利用することができる	1	1	297
		交通ルールを理解している	1	1	344
		自然災害時に避難することができる	1	1	301
		公共交通機関、及び施設利用のマナーを理解している	1	1	309
		法律や制度を理解している	2	1	175

就労アセスメントシートから「自立活動アセスメントシート」を開発



6区分	27項目	課題の強さ	優先度	ヒューマン・サイズ
健康の保持	生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	140	170	301
	病気の状態の理解と生活管理に関すること	127	155	269
	身体各部の状態の理解と管理に関すること	167	167	319
心身の安定	障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること	154	177	273
	健康状態の維持・改善に関すること	117	150	271
	情緒の安定に関すること	135	152	276
人間関係の形成	状況の理解と変化への対応に関すること	135	171	286
	障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	118	155	284
	他者とのかかわりの基礎に関すること	133	133	284
環境の把握	自己の理解と行動の調整に関すること	114	123	289
	集団への参加の基礎に関すること	136	157	280
	他者の意図や感情の理解に関すること	132	135	284
環境の把握	係属する感覚の活用に関すること	140	170	256
	感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	155	173	271
	感覚の補助及び代行手段の活用に関すること	152	166	265
環境の把握	感覚を統合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	143	157	262
	認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること	143	157	262

Model 1 | 作業能力と体調管理

Keyword 作業効率 体調の相談

目指す姿 手指の巧緻性を高めるとともに、作業の効率化について自分なりに考えて取り組むことができる。

活動内容

- ①手先を使った課題に取り組む。
- ②ワークシートで課題に対して、より良く、速く行うためにはどんな工夫ができるかを考える。
- ③再度やってみる。
- ④振り返る。

授業づくりのポイント

- ・個に応じた課題を設定し、繰り返し取り組む。
- ・ワークシートを使用し、自ら振り返る時間を設定する。

生徒の変容

- ・繰り返し取り組むことで、手指の巧緻性に確実な伸びが見られた。



Model 2 | 集団の中のコミュニケーション

Keyword 自己発信力 伝わる喜び

目指す姿 自分の声の大きさを知る。自分の思いや考えを言葉に出すことができる。

活動内容

- ①自己紹介をする。
- ②大きな声を出してマビーを動かす。
- ③「2人で協力クイズ大会」に取り組む。
- ④相手の気持ちを考える。



授業づくりのポイント

- ・緊張感のない楽しい雰囲気づくりをする。
- ・時間がかかっても、発言するまでじっくりと待つ。

生徒の変容

- ・自分から挙手して発表するようになった。
- ・隣の友達に自分の考えを伝えるようになった。
- ・まわりに聞こえる声で発表できるようになった。



Model 3 | 自分を知る

Keyword 自己理解 特性理解 トリセツ

目指す姿 自分のことを理解し、相手に自分のことを伝えることができる。

活動内容

- ①自分の好きなこと、得意なことを整理する。
- ②自分の嫌いなこと、苦手なことを整理する。
- ③現場実習や作業学習等での課題を整理する。
- ④トリセツをつくる。

授業づくりのポイント

- ・iPadを用い、個の課題を設定した動画を見て、学習する。

- ・シェアする時間を設定し、解決策を考える。

生徒の変容

- ・自分の課題を客観的に捉えられるようになった。
- ・人の意見を聞き、自分に置き換えて考えられるようになった。



熊本障害者職業センターの職業カウンセラーの方に「トリセツ」の様式や、移行支援等の活用方法について、アドバイスをいただきました。

Model 4 | 作業と休憩の切り替え

Keyword 切り替え 集中力の持続

目指す姿 決められた場所で作業と休憩を繰り返す。もう少し頑張るとできそうな課題にチャレンジする。

活動内容

- ①ペーパービーズの活動を行う。
- ②休憩をする。
- ③作業場所に戻る。
- ④ペーパービーズの活動を行う。

授業づくりのポイント

- ・個に応じた、休憩の過ごし方を考える。
- ・できることを少しずつ増やす。
- ・見通しがもてるように、教材の提示の仕方を工夫する。

生徒の変容

- ・休憩からの復帰を、自分でできるようになってきた。
- ・作業時間が延び、作業量が増えた。



Result | 個の課題を落とし込む授業づくりが大切

本校、高等部職員(9人)に自立活動について、アンケートを実施した。

自立活動(チャレンジタイム)についてアンケート結果

- 直近の課題を設定して授業づくりを行うことができた。(2)
- アセスメントをすると、グルーピングを効率的に、客観的にすることができる。(2)
- 環境を整えて作業する、自分から相談するなど、般化する姿が見られた。(2)
- 環境の把握、身体の動き、コミュニケーションなど、関連させながら取り組むことができた。
- 知的障がいの子どもたちの自立活動におけるグルーピングの在り方としては、日常生活の様子から本人の取り組む優先順位を考えて学習ができたことが良かった。

▲優先課題の見取りが難しかった。

▲グループの個別化をどのようにして取り組んでいくのか、今後検討が必要。

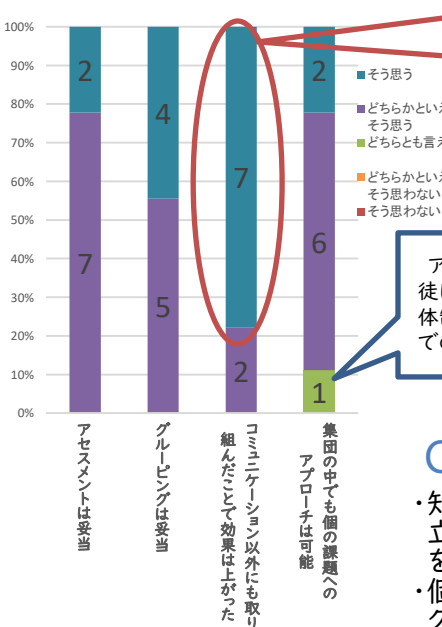
▲定期的に自立活動に取り組むための時間確保、時数配分の工夫が必要。(2)

▲グループ内での学習内容の選定を検討すべき。

▲各生徒に応じた明確な自立活動の指導すべき課題を教師が意識し、特設及び学校教育活動全般で取り組むべき。

▲個別の指導計画に記入し、それに応じた適切な授業内容を行い評価すべき。

自立活動(チャレンジタイム)を振り返って



アセスメントの結果を基に自立活動に取り組んだことで、課題を焦点化して学習内容を組み立てることができた

アセスメントに該当しない生徒については、1対1の支援体制を組んでいるため、集団での取組を行っていない

Conclusion | 「行動」から優先課題を設定

- ・知的障がいのある生徒の自立活動における課題は、一見分かりづらいが、自立活動アセスメントシートを用いることで、生徒の行動面から優先すべき課題を導くことができる。
- ・個々の課題へアプローチするための授業づくりやワークの工夫を行うことで、グループの形態でも個に応じた自立活動を行うことができる。

アセスメントとグルーピングに基づく指導に一定の効果と肯定的評価が得られた。一方で、個々の実態把握が詳細であればあるほどにグルーピングとグループ内の包括的な課題設定に違和感が生じてくることが想定される。

知的障がいを対象とした特別支援学校の「教師：生徒」の人数比の中で個の課題に特化した展開ができる授業体制の研究が次なる課題として考えられる。

熊本大学大学院教育学研究科(特別支援) 本吉大介准教授